

## 英国の人種暴動の背後

キット・クラレンバーク（英国人調査ジャーナリスト）著、MintPress News、2024年8月10日  
脇浜義明訳、田中一弘補訳 \*脚注は訳注

### トミー・ロビンソンとシオニスト・アジェンダ

7月29日以降英国は危機に突入した。極右が扇動する暴動で国中の町や都市が非常事態になっているのだ。武装した怒れる群衆が人種差別とイスラム嫌悪の偏見に動かされて、アラブ系の人々の家庭や商店やモスクを襲い、難民が収容されているホテルなどに火炎瓶を投げつけて炎上させるなど、明らかに大量殺戮を企てているものだった。そして、警官隊とも激しい衝突を繰り返し、数百人が逮捕された。このヘイト暴動に対抗する抗議運動も生じ、街頭は大混乱した。

キア・スターマー首相は「全面的に法執行で取り締まる」と宣言し、すでに数人の暴徒は裁判で数年の懲役刑を言い渡されている。しかし、緊張はまだ消えていない。英国近代史で思いがけない社会混乱の原因を国内や外国の不穏分子のせいにした事例が多くあったが、それと同じように今回の暴動の原因に関しても、悪意に満ちた責任転嫁が行われている。

騒動の本当の原因、それは明白なものであるのに、それはどういう訳か看過されている。一つには、一般的な英国人は悪化する経済状態に捕らわれている — 生活必需品の価格上昇が続き、生活水準が目に見えて低下している。新たに政権の座についた労働党政府はそういう民衆の苦境を打開する意図を明らかにしていない — それどころか、自滅的な緊縮政策を、強化とはいわないが、それを維持し、悲惨な状況を緩和するために何もしないことを実質的に決定しただけでなく、例えば高齢者や生活困窮者の暖房費の補助である冬季燃料給付金を大幅に削減し、何百万人もの社会的弱者の生命を脅かす政策を講じているのだ。

このような状態がファシズムを育てる土壌であることは、過去の歴史が教えている。権力の座について主流派となった勢力は、ネオリベラリズム資本主義が産みだした悲惨に対して何もしないから、人生と社会に絶望し幻滅しながらも必死になって生活する貧しい労働者階級の人々は、主流派の外に目を向け、右翼ポピュリストのナイジェル・ファラージや反ムスリム極右のトミー・ロビンソンのような過激派に救いを見出すようになるのだ。つまり、極右へ走る人の数が増えるのだ。極右が提供する処方箋は、いつものことだが、社会の不幸や個人々の貧困を政治・経済体制ではなく、移民、難民、「よそ者」のせいにするのである。

さらに不吉なことは、8月に英国を熱くした反ムスリムの熱情は、シオニスト団体のイデオロギー的、政治的、軍事的利益に奉仕する影の役者が扇動したことを示す明確な証拠があることだ。

### 「奴らを追い出せ！」

暴動が何故に、そしてどのように生じたかに関する様々な意見や反論の嵐があるが、サウスポートの子どもたちのヨガ・ダンス場への野蛮なナイフ攻撃が発端となって7月29日に暴動が始まったという点は疑いの余地はない。3人の子どもが殺害され、8人が負傷、そのうち5人は依然として重体である。傍にいた大人2人も重傷を負った。このショッキングなニュースはすぐに国中に広がり、途端に容疑者に関するとんでもない推測とデマが流れた。

事件後何時間も経たない間に、コロナのとき人気があった反ロックダウン・アカウントが、実行犯は「アリ・アル・シャカティ」という名の「難民ボートで去年英国へ来た亡命希望者で・・・MI6の警戒リストに乗っている人物」だというデマをXにポストした。ポスト後1時間でこのデマは削除されたが、1時間で十分に効果を発揮した。大勢の極右インフルエンサーが即座にこのデマに飛びつき、それに尾ひれを付けた根拠のない難民を犯罪者化するデマを生産した。その中に、そこそこ有名なファシスト活動家のトミー・ロビンソン、実名スティーヴン・ヤクスリー・レノンがいたのである。

彼は、サウスポート殺傷事件の犯人は「ムスリムらしい」と宣言し、「あいつらはいつも女を狙う」と付け加えた。翌日勢いに乗った群衆がサウスポート・モスクの前に陣取り、ロビンソンの名をお経のように唱え、「アラーなんか糞くらえ」と極右のデモの決まり文句のイスラム嫌悪のスローガンを詠唱した。モスクに石や火炎瓶を投げ、デモを見張る警官をも攻撃し、警察車両を倒して放火した。こ

の悪意のデモが先陣となって、それを模倣するデモや暴動が英国各地に起こり、現在我々が目の当たりにしたような惨状になったのである。

どの暴動でも警察はすぐに暴徒がかつてのイングランド防衛同盟（EDL）のメンバーであることを確認した。イングランド防衛同盟は筋金入りの反イスラム扇動者とサッカーで騒ぐフリーガンなどをメンバーとする極右組織で、現在は活動停止状態であった。ロビンソンはこの組織のかつての指導者であった。彼は「もう10年間もEDLの活動はなかった」という理由で、Xを通じて警察の暴徒の身元確認を小ばかにした。しかし、サウスポート人種差別暴動のビデオ映像を見ると、彼がかつて首領を務めていたEDLとそのグループが採用していたストリートファイトの教義を蘇らせたようにみえた。彼は次のように言っていた；

「人は・・・我々「怒れる男たち」を非難するが、我々の怒りは正しい。こんなことはもっと早く起きるべきだった・・・今夜起きたことは実際にはお前らが招いたことだ。お前たちがやったのだ。お前たちの政府がやったのだ。警察がやったのだ・・・お前らは英国国民よりアフガン人、ソマリア人、エリトリア人、シリア人、パキスタン人の方を大切にする。あいつらは我々にとって危険だ。難民船を止めよ。ホテルに収容した難民を追い出せ。奴らを追い出せ。奴らを送り返せ。奴らはここにいないべき人間じゃない。英国の男たちは立ち上がるだろう。いつもそうしてきた。家族を守るために立ち上がらなければならないのだ。」

8月8日、情報機関と協力関係にあるが「独立系」と自称するジャーナルである『バイライン・タイムズ』は、「英国人種差別暴動の扇動者の正体」に関して調査した長い記事を発表し、その中でロビンソンの周囲の「重要プレイヤーと大西洋をまたぐネットワーク」をはっきりさせた。記事は、ロビンソンが英国人種差別暴動を扇動したのは、ドナルド・トランプの支持者である裕福なパトリック・マイケル・バーンなど、ヨーロッパと北米の金持ち極右人物たちのどろどろした結合体が背景にある、と論じている。しかし、そこまで分析しながら、ロビンソンのイスラム嫌悪暴力扇動をそそのかす、もっと信憑性がある候補者、イスラエルとシオニストに関する言及はまったくないのである。

### 「外国の圧力」

EDLは2009年6月にイギリスの街頭に突如現れた。ロビンソンとその仲間は自分たちを「人権団体」だと主張し、「我々は人種差別主義者でも暴力主義者でもない。もう黙っていられないだけだ」と言い張って、労働者階級国民のために立ち上がっただけで、イスラム過激主義者に関して懸念を表明するジェスチャーを採っている。しかし、彼らが英国の町や市で定期的に繰り広げるデモの言動を見ると、まったく違うことがよく分かる。

EDLは自分たちが人種差別団体でないように見せることに常に熱心だった。すなわち、マイノリティの構成員が目立つように懸命であった。キプロス人、ギリシャ人、ヒンドゥー教徒、ユダヤ教徒、LGBT、キリスト教支持のパキスタン人、その他のマイノリティを、デモのとき、目立たせるように配列した。主流メディアはほとんど気が付かなかったようだが、中でもユダヤ人グループが常に運動の中で目立った。EDLが活動した5年間、彼らのデモにはイスラエルの旗がたくさんはためいたが、主流メディアにはほとんど注目されなかった。

EDLが外国（イスラエル）の利益に奉仕する活動をしているのは明白に見えているのに、いつも公然の秘密であった。EDLは英国内で慈善団体とか政党を結成しなかったが、自分たちの名をそのまま使った商業事業体を2つ作って登録したことがある。2011年6月、ロビンソンの仲間の英国人はイングランド防衛同盟という名の会社を立ち上げた。1か月後、それはイングランド&ユダヤ防衛同盟と改名された。2010年12月にはイングランド防衛同盟LTDという会社名が登録された。

2年後、それはユダヤ人防衛同盟会社と改名され、重役の一人である好戦的シオニストのロベルタ・ムーアが米国の極右団体のユダヤ機動部隊と連携させた。ユダヤ機動部隊はビクター・バンシアという人物が創設した筋金入りの原理主義的シオニズムを信奉する団体である。バンシアは西岸地区の不法入植地の資金調達活動を行い、イスラエル擁護を唱えていたにも拘わらず、1980年代のソ

連のユダヤ人処遇に抗議して、ニューヨークといワシントンで爆弾事件に関与したために、イスラエル入国を拒否されていた。

EDL 上層部はユダヤ機動部隊との関係を「過激だ」として、その後ムーアとユダヤ人機動部隊と距離を置くようになった。これはロビンソンの考えでは納得できないことである。2019年2月、元EDL 首脳であったロビンソンがイスラエルへの愛を宣言し、自分もシオニストであるというカードを切るビデオ映像がリークされた。そのビデオは、「パレスチナだって！ 何故お前らはパレスチナを支持するのだ。もし、明日にでも戦争になれば、多分そうなるだろうが、俺はイスラエルのために戦う最前線へ行く」と誇らしげに宣言する場面で終わっていた。

5か月後、ロビンソンは、去年の5月に告訴された性犯罪容疑者の名を、裁判所が保護のために公表を禁じていたのを、公表したために法廷侮辱罪で13か月間の服役刑となった。服役中の彼に対し、悪名高いシオニスト・ロビーのシンクタンクである中東フォーラムが彼の裁判闘争費用を援助したばかりでなく、金を使って25,000人を集めて、ロビンソンのために抗議運動を組織した。そのときの声明は「中東フォーラムは危機にあるロビンソン氏を援助している・・・中東フォーラムはロビンソン氏の安全と早期釈放を求めて英国政府に圧力をかけて、外交的にロビンソン氏を援助している」というものであった。

この声明書には、以前イスラエル外務省と国防省の職員で、現在中東フォーラムの指導者であるグレッグ・ローマンの署名があった。ロビンソンを釈放せよという「外国からの圧力」が、どの国から発せられたものなのか、推して知るべしである。

## 潜入捜査

EDL の中で、イスラエルと一貫した深いつながりを持ち、シオニズムに親近感をもっていたのは、ロビンソンとムーアだけではなかった。EDL 創設者の一人「ポール・レイ」もそうで、彼の人種に関するブログがノルウェーの連続テロ実行犯のイスラム嫌悪者アンネシュ・ブレイベイクの宣言書の中で引用されていた。彼は英国のパレスチナ連帯運動の中に潜り込むという怪しげな経歴も持ち主である。彼が自分の意志で潜入活動を行ったのか、国家工作員として潜入したのかは、今日になっても不明であるが、それがパレスチナ連帯運動に大きな害を与えたのは明らかである。

2006年9月、米国のイスラム嫌悪ウェブサイトの FrontPageMag が、前の年に英国人「ボランティア」が国際連帯運動（ISM）のロンドン支部に潜入したいきさつを発表した。ISM は非暴力抗議活動を行っている親パレスチナ運動グループで、世界各地に支部がある。ISM はボランティアを訓練して占領地に派遣し、同地の非暴力抗議運動を支援している。非暴力連帯活動にも拘わらず、2003年に二人のISM 活動家ーレイチェル・コリーとトム・ハーンダルーがイスラエル占領軍に殺害された。

調査ジャーナリストでパレスチナ連帯活動家のアサ・ウィンスタンリーは、英国諜報機関工作員がかなり前からISM に潜入していることを明らかにした。ポール・レイ（実名はポール・シナート）もその工作員の一人であった。FrontPageMag 記事が書いているが、彼は「すでに英国警察の覆面捜索活動を行った経験」があった。その記事は「シナートが持ち帰った写真や情報はISM を監視する諜報機関にとって貴重なものだった」と付言している。

シナートが持ち帰った写真や情報で利益を受けた「ISM を監視する諜報機関」がどこの諜報機関であるかは一目瞭然である。シナート以外のISM に潜入した英国人スパイも情報をシオニスト国当局に渡したのは明らかである。2008年には、イスラエル政府はスパイから得た情報に基づいて、占領地に入ったISM ボランティアを国外追放したり、入国を阻止したりできるようになった。ISM の主要活動は活動家を占領地へ送り込むことであったから、このスパイ活動で大きな打撃を受けた。

あの狂気の「グレート・リプレイスメント」（大置換）陰謀説（訳注：ヨーロッパがイスラムに乗っ取られるという白人至上主義的・極右思想。）は、5年間活動したEDL の中核思想だったとこと、そして現在もロビンソンや英国人種暴動を扇動したファシストたちによって広められていることを忘れてはならない。この陰謀説は、西洋の為政者や知識人がヨーロッパに入ってくるムスリムの洪水でヨーロッパが国粋文化が破壊されてイスラムのカリフ国家みたいな「ユーラビア」になる事態を黙認していると主張する。

この人種差別的な馬鹿げた談話の創始者はバート・イエオール（元モサド工作員ギゼル・リットマンのペン・ネーム）であった。1961年、彼女と英国人の夫デービッドは、モロッコからユダヤ系の子どもをイスラエルへ移送して入植者とするシオニズム事業「ムラル作戦」を主導した。（訳注：人口問題はイスラエルの癌で、ヨーロッパの白いユダヤ人のイスラエル移民には限度があったので、北アフリカや中東の有色ユダヤ教徒をイスラエルに移送して、アラブ人より人口を多くしようと懸命であった。イスラエルの歴史学者トム・セゲフは、イスラエル工作員が南米のインディオを即席ユダヤ教徒に改宗させてイスラエルに移送した事例を指摘している）彼女はモロッコの首都ラバトにキリスト教宣教師を装って3か月間滞在し、人々の信用を獲得して子ども集めを行った。実際は拉致であり、誘拐であった。

リットマン夫婦はその後種々のシオニスト組織に拘わり、イスラム嫌悪運動を指導した。二人にはかなり怪しげな私的・職業的経歴があったにも拘わらず、ギゼル・リットマンの程度の低い偽善的な「グレート・リプレイスメント」説は欧米の右翼の間で人気を得た。2019年のガーディアンには次のような記事があった；

「かつてあインターネットの片隅でほとんど人目に付かなかった反イスラム思想が、今や西洋の政治の中で日常的に見られる存在となった。」

リットマンの「説」は、シオニスト国が数十年間にわたってムスリムを日々差別し、よそ者扱いして嫌悪し、腐敗した皆殺し戦争を通じて入植植民事業を成し遂げるために、アラブ人を悪魔化し、非人間化するのを正当化してきた思想である。その思想が、トミー・ロンビンソンのような人物を通して西洋の情報空間をイスラム嫌悪で汚し、ついに英国で人種差別暴動という形で沸騰したのである。

この真実に関してマフィア世界のような沈黙の起きてが権力筋にあるために、欧米のメディアも政治家も、シオニスト国がいくら犯罪行為を行っても、無罪放免しているのだ。